

「お疲れ様でした」

店主に一礼し、バイト先の酒屋を出ると、空は茜色に染まっていた。

今日もよく働いた、と独り言ちながら何度か伸びをして、それから僕は、視界いっぱい  
いに広がる街を眺めた。

なんといいことはない、どこにでもありそうなこの街は、しかしかつて、その全てを  
焼き尽くされた。

魔術王による人類史焼却。

世界を滅ぼしかけたその企みは、とある組織によって阻止された。

「……………」

そんな過去などなかったかのように、街は人の営みで溢れていた。

視界に映る商店街には、家路を急ぐ人々の姿が在る。

誰もが皆忙しなく、しかし確かに生きていた。

「……………」

胸の内を、万感の思いが満ちた。

確かに自分は、この世界を救ったのだと。

自分たちの手で拒んだ過去であつても、あの日々を忘れることはない。

何もかもが黒焦げになつたあの焼け野原を、今でも覚えている。

そこで得た出会いや別れも、鮮明に記憶している。

—— あの日、握つた手の平の感触を覚えている。

「……帰ろう」

僕もまた、街の人たちと同じように家へと急いだ。

愛すべき我が家。

今の自分にとって、帰るべき場所。

バイト先から二十分。

大橋を渡つた先にそのアパートは存在する。

「……地震怖いなあ」

十人中十人がオンボロと言うであろうその外観に苦笑が漏れる。

儉約が大切と言つてこのアパートへの居住を決めた相方は、住めば都ということに慣

れ始めているようだけど、個人的にはもう少し綺麗な所に引っ越したい所存だ。

なにせ大事な、きつと世界で一番大切な女の子を住まわせるのだから。

……まあ、今のところ主に予算の都合で引っ越しの予定はないんだけど。

甲斐性なしな自分に半ば呆れながら錆びついた階段を上る。

二階の端。

日当たりだけはいい角部屋の、これまた古臭いチャイムを押すと、ドアの向こうから  
パタパタと足音が届き、そして、

「おかえりなさい、先輩！」

そんな、元気な声が僕を出迎えてくれた。

エプロン姿の彼女は、まるで星のように眩しい笑顔を浮かべていて。

それを見ただけで、今日一日の疲れが吹き飛ぶのが実感できた。

「うん、ただいま。……ただいま、マッシュ」

誰よりも大切な後輩に、僕は出来る限りの笑顔を返した。

世界を救った後、僕はカルデアには残らず日常に帰るという選択をした。



元々、魔術の腕はからつきしだったから、カルデアの研究者として残るといふのは少し無理のある話だった。

ロマンを始めとしたメンバーたちは別れを惜しんでくれたけど、最後には快く送り出してくれた。

『元気でね。君に最上の幸福があることを祈るよ』

涙ながらに僕の手を取り、笑顔を見せてくれたロマンの顔を覚えている。

そうして、僅かな資金と幾つかの魔術礼装を手に、僕はカルデアを出ただけ……。

「今日は秋刀魚が安かったので蒲焼にしました」

言って、マシユは卓袱台に料理を並べ始めた。

秋刀魚の蒲焼にワカメの味噌汁。

隣のおばあちゃんからいただいた漬物と、炊き立ての銀シャリ。

少々質素ではあるけど、純和風の夕食だ。

「ありがとう、マシユ。とっても美味しそうだ」

「先輩にそう言っていただけで光栄です。では、早速賞味ください」

マッシュに促され、二人、手を合わせる。

「いただきます」

号令をかけてから、僕は蒲焼に箸を伸ばした。

口に運ぶと、香ばしい薫りが広がった。

噛めば甘い脂が溢れ、甘辛のタレと合わさって食欲を促進させる。

「美味しい！ 美味しいよマッシュ！」

「それは何よりです、先輩」

はしゃぐ僕に、マッシュはニコニコと微笑んでいる。

至福の時だ。

まあ、彼女との生活においては頻繁に訪れるものではあるんだけど。

『先輩！』

カルデアを出た僕を、愛すべき後輩ことマッシュ・キリエライトは慌てて追いかけてきた。

『わ、私も連れて行ってはいただけませんか！？』

その言葉にひどく驚いたのを覚えていた。

彼女はダヴィンチちゃんが言うところの『優しい奇跡』とやらで一命を取り留め、また人間らしい寿命を得たと聞いていた。

だから、彼女は懂れた外の世界に出ること自体は何も不思議なことではなかった。でも何故自分と？

どうしてカルデアにおける唯一のマスターという肩書を失い、何者でもなくなった自分と共に行くなどと言い出すのか。

僕にはてんで分からなかった。でも、

『ダメ……でしょうか？』

不安そうにこちらを見上げてくる彼女に、そんな疑問は霧散した。

そんなものはどうでもよかった。

『いいに決まってるじゃないか』

一も二もなく僕は彼女を受け入れた。

大切な後輩である彼女を不安にさせるなんて、尊敬される先輩がすべきことじゃなかったから。

『一緒に生きよう、マシユ』

手を差し伸べた僕に、彼女は一瞬目を見開いて、

『……はい！ 先輩！』

元氣よく、その手を握りしめたのだった。

そんなわけで、僕とマシユは英霊たちによって救われたこの世界を一緒に過ごしている。

というか、一緒に生活している。

……いやまあ、別に言い換えなくてもいいことだとは思うんだけど。

一緒に生活、と言うとなんだか雰囲気が変わるというかなんというか。

分かりやすくなると思うんだ。あるいは伝わりやすくなる。想像しやすくなる。言ってもいい。

どういうことか？

そうだな……たとえば、

「A」

「……………」

浴室でシャワーを浴びるマシユの鼻歌を聞きながら一人悶々としている僕の気持ちとか。

六畳一間のこの部屋は、当然のように浴室と部屋の距離も近かった。

たとえベランダに逃げ込んでも鼻歌とシャワーの音が聞こえてくるのはさすが安アパートといったところ。

未だ未成年でお年頃な僕にとってこの状況は精神衛生上非常によろしくないもので、極力早急に引越したいところなんだけど、引越しの話を持ち出す度に相方であるマシユはやりわりと拒否してくる。

『ダメです。高い賃貸料を支払うために先輩が無理にバイトを入れて身体を壊す可能性が極めて高いと推測します』

『そ、そんなことは……』

ない、とは言いきれず、どうしたものかと困った顔をした僕に、マシユもまた困った顔をした。

『しかし、先輩にも先輩なりの考えがあたりでしょうから無碍にするのはいけませんね。……そうですね、カルデアから頂いた世界救済に対する賞与を用いるか、私が働きに出

るといふ方向なら……』

『それはダメだ』

即答した。

『カルデアからもらったお金はマシユと世界を見て回るためのものだし、マシユに働かせるなんて情けない真似はできない』

『ですが、先輩の望む引越しを行うにはそれしか……』

そんなことを言ってくれる優しいマシユに、僕はゆるゆると首を横に振る。

『いいんだよ。引越しがしたい理由なんてちっぽけなものだし。……それに、マシユがああ可愛いエプロン姿で出迎えてくれないなんて嫌だ』

不安そうなマシユを安心させるため、僕は最後に軽口を叩いた。

予想ならここで『先輩、最低です』といい具合に冷たい言葉を吐いてもらい、場を和ませる手筈だったんだけど。

『かわいい……』

当の彼女は頬を真っ赤にしている。

『ま、マシユ??』

『は、はい！……先輩のために、全身全霊をもってエプロン姿での出迎えを徹底しま

す」

『あ、うん……ありがとう……』

頷く僕の眼前、マシユは両手で赤くなった頬を押さえ、

『かわいい……かわいいと言われてしまいました……』

何か小声で言っていたけれど、あれは結局なんて言っていたんだろう。

とまあ、そんなわけで当分引越しは出来なさそう。

結果として、僕はまた一人悶々と永遠にすら思える時間を過ごしている。

♪

風呂に入っている間、マシユは絶えず鼻歌を奏でている。

余程上機嫌なのだろう。彼女が幸せそうで何よりだ。

そう、幸せ。

今の僕は、マシユの幸せのために生きている。

彼女の幸福を守ることが、僕の次の役目だった。

♪……えっ？」

ん？」

マシユの鼻歌が途切れた。

不審に思った次の瞬間。

「きゃあああああああああああああ!?!」

悲鳴。

そして扉が開く音。

「せ、せせせ先輩!」

「どうしたのマシユウわあああ!?!」

慌てて浴室へと向かおうとした僕に浴室から飛び出てきたマシユは正面衝突し、僕の胸に頭突きをかましてきた。

何とか受け止め、しかし一身上の都合でその背に手を回せない僕に、彼女は必死で状況を説明してきた。

「え、エネミーです! 黒光りするエネミーが風呂場に!」

「黒光り……? ああ、例のアレか」

さすがボロアパート。懐が広いなあ。

「助けてください先輩……!」

今にも泣き出しそうな彼女に、僕は震える手でその頭を撫でた。

「だ、大丈夫。任せて、僕が退治するから」

「先輩……」

「だから、その……その代わりに、お願いを一つ聞いてほしいんだ」

「お願い……?」

首を傾げたマシユに、僕は彼女から顔を背けたまま、告げた。

「えっと……この数十秒間は、なかったことにしてほしいんだけど」

「え?」

「……ほら、これ巻いて」

自分のバスタオルを渡すと、ようやくマシユも自身の現状、風呂場から一も二もなく飛び出てきた自分が今どのような格好でいるのかを理解してくれたらしく。

「——っ——!」

一瞬で、その顔を赤一色に染め上げた。

「ず、すぐ済ますから待ってて」

彼女が何か言う前に、僕は慌てて浴室へと急いだ。

「(迷惑をおかけしました……)」

「いや、こちらこそ……」

無事エネミー退治を終えた後。

僕らは二人、卓袱台を囲み頭を下げ合った。

あれから風呂に入り直し、パジャマに着替えたマシユは、どこか落ち込んでいるように見えた。

「……先輩」

「ん？ 何？」

「私は、弱くなってしまいましたね……」

「え……？」

呆けた声を漏らした僕の隣で、体操座りをしていたマシユはその腕に顔をうずめた。

「あんなか弱いエネミーに対して気が動転するなんて……」

また変なことで落ち込んでるなあ……。

「……女の子ならそんなもんじゃないかな」

「女の子……ですか」

「うん。マシユはもうサーヴァントじゃないわけだし、一般的に見てもただの可愛い女の子だと思うけど」

「……そんな私に、先輩の隣にいる資格はあるのでしょうか」

「そんなこと言ったら僕なんて魔術も使えないただの一般人だよ一般人。僕の方こそ、マシユの隣にいる資格なんてないように思えるけど」

言いながら、本当にそんな気がしてきた。

何の取り得もない僕がこんな可愛い女の子と一緒に暮らしていいのだろうか。

不安になってきた僕に、マシユは慌てて口を開いた。

「そ、そんなことはありません！ 先輩には、私の隣にいてほしいです！」

「うん、僕も同じだよ。マシユに隣にいてほしい。サーヴァントでなくたって何の問題もない。マシユにいてほしいと思う。……そういうものなんじゃないかな」

「……………」

そんな僕の言葉に、マシユはしばらく黙り込んだ。

「……先輩」

「ん？」

視線を向けると、マシユは柔らかな笑みを浮かべていた。

「先輩のような人が私の先輩であることを、心から誇りに思います」

「……一般人だけいいの？」

「はい。一般人でも、先輩は先輩ですから」

「そういうものなの？」

「そういうものです」

「そっかあ」

何とも気恥ずかしくなってしまう僕を他所に、マシユは幸せそうににこにここと微笑んでいた。

それから僕も風呂に入り、そしてテレビ番組を見つつ今日あったことを話しているとあつという間に就寝時間になった。

そそくさと布団を敷く僕に、炊飯ジャーの前にしゃがむマシユが問いかけてくる。

「先輩、明日も今日と同じ時間に出勤でしょうか」

「うん。いつも悪いね、マシユ。毎日早起きさせてしまつて」

「いえ、労働に勤しむ先輩に比べれば全く問題ありません」

びしつと言つてのけるマシユ。カルデアにいた頃から蓄積されてきた目覚まし係としての自負すら感じられる。

「じゃあ、電気消すよ」

かちりと電灯の電源を落とし、僕は薄っぺらい布団に横たわった。

しんと静まり返った六畳一間に、僕と彼女の呼吸音だけが響く。

手を伸ばせば触れられる距離。

すぐ隣の布団に可愛い後輩がいるという状況は、彼女と生活を始めて一ヶ月が過ぎた現在でも未だ慣れないことの一つだった。

「明日が終わったらまた休みだね。マシユはどこに行きたい？」

「先輩とご一緒できるならどこでも嬉しいです」

「家の中でも？」

「はい」

「……そっか」

「先輩はアウトドアの方が好ましいですか？」

「ううん、そんなことはないよ。……僕も、マシユと一緒にならどこでも嬉しい」

「……そうですか」

「うん」

そうして僕とマシユはしばらく取り留めもない話を続けていたけれど、やがて沈黙が

降ってきた。

「……先輩」

「何？」

「……明日も、先輩と過ごせるんですね」

「……そうだね」

肯定を返すと、暗がりの中、マシユは微笑んで、

「……嬉しいです」

そんな可愛い事を言ってきた。

抱きしめたくなる衝動を抑えながら、僕はどうにか言葉を返した。

「……明日もよろしくね、マシユ」

「はい、こちらこそよろしくお願いします、先輩」

「おやすみ」

「おやすみなさい」

挨拶を交わし、目を閉じる。

可愛い後輩。

優しいバイト先の店主。

部屋は狭くてボロいけど、生活に困る程ではない。

明日からも続くであろう幸福な日常に思いを馳せながら、僕は夢の世界へと落ちた。

「……先輩？」

「寝ましたか？」

「……寝ましたね？」

「よい、しよ……」

「ふふ、可愛い寝顔です……」

「戦闘時は、あんなに勇ましいのに……」

「本当に、素敵な先輩です……」

「落ち込んだ私も、優しく慰めてくれて……」

「私に……隣にいてほしいと願ってくれて……」

「先輩……」

「んっ……」

「……大好きです、先輩」

「……おやすみなさい」